

米内 正

田沢湖町立歯科診療所

日常の臨床で、20代で咀嚼障害を訴え、ほとんど全顎にわたり補綴処置を必要とする症例に再三出会うことがある。この症例もその中の1つの例である。

症 例

患 者 26才 男性

初 診 日 S50年12月16日

主 訴 7の歯痛および咀嚼障害

既 往 歴 全身的には特記事項なし

口腔内所見	8 6 5 2	1 2	欠損	4 6 7
	6	6		7 4 2

: 残根 ① 1 2 ③ : 開面金属冠の Bridge.

歯 周 組 織 : 歯石沈着, 軽度の発赤, 腫脹。

治療計画

1. 補綴前処置
2. 仮義歯の製作
3. 中心咬合位保存の処置
4. 咬合平面の決定
5. Anterior Guidance の決定
6. 上下顎の部分床義歯の製作
7. リコール

以上の計画を基にして上下顎の補綴物を完成し、口腔内に装着した。

考 察

今回私はP・M・S概念を応用し治療をおこなった。この概念によるオーラル・リハビリテーションは称讃をおくるに充分価値ある理論として認めたい。しかし現実に本ケースを手がけるとき、理論と実際を一致させることはまず不可能である。そこで臨床とは、咬合器を操作し、それである程度の生理学的なものを表現し不十分なことはテクニックでカバーし、口腔内に装着した補綴物は咬合調整が少なく、それと同時に患者が快適であるものを作りあげることがたいせつである。

演題21. 修復物の咬頭の必要性

— 「何故咬頭を持たねばならないか?」 —

○小竹 秀樹, 田中 久敏

上顎前方牽引法は、上顎骨の前方成長を促進する手段として、かなりの臨床効果が期待できる。けれども、一方には、上顎前歯の過度の唇側傾斜、臼歯の挺出、あるいは被蓋が浅くなるなどの症状を呈する場合がある。私たちは、これらの治療効果については、本法を適用する時の患者の年齢や、顎外力による力学的影響が、かなり関与しているものと推察している。そこで今回は、上顎前方牽引法の顎顔面へおよぶ整形力の力学的影響を中心にして実験的検討を試みた。

実験資料は、dental age III A と adult の dry skull で、前方牽引の強さは1kgとし、頭蓋に現われる、ひずみの量と方向は、45° rosette type strain gauge を、上顎骨、頬骨、側頭骨、前頭骨、蝶形骨の骨面13カ所に接着して、変位測定を動ひずみ計を用いて行なった。計測値の解析はMohrのひずみ円を作図して行なった。実験に用いた牽引装置は、従来より、広く臨床に用いられている型のもと、新たに考案した上顎歯列全体と口蓋を覆う型のものを用いて、力学的影響を検討した。牽引方向は、咬合平面に対し0度と下方30度の二方向からとし、牽引部位は、従来のもものでは、上顎第1大臼歯頰側、歯列口蓋を覆う型の装置では、大臼歯、および犬歯部の頰側とした。

今回の実験成績は、adult のものでは、装置の種類や力の方向を変えても、ひずみ量は小さく、本法の顎顔面への影響がほとんど認められなかった。

一方、dental age III A のものでは、従来の装置においては、ひずみの方向が、臼歯部で下方に強く表われ、上顎複合体を前上方へ回転させる様に働いた。とくに下方30度牽引の場合には、この傾向が強く認められた。歯列口蓋を覆う型の装置では、臼歯部からの牽引で、前方上への回転成分が残ったが、犬歯部からの牽引では、上顎骨を回転させる臼歯部での下方への引っぱりひずみは著しく減少した。とくに0度の牽引においては、引っぱりひずみの方向が、前下方に集約されており、ほぼ上顎複合体の成長方向に同一であった。

以上の結果から、临床上、上顎前方牽引法を、より効果的なものにするためには、現在使用している装置の形態と、牽引の方向について、とくに再考する必要があると思われる。今後、その臨床応用についてさらに検討を重ねてゆきたい。

演題20. パーシャル・デンチャーを含むフル・マウス